

## 岡本章庵関係資料（一）

有馬 卓也

### 目次

#### 【はじめに】

#### 【凡例】

- 【一】年表・「章庵岡本監輔氏年表」
- 【二】雑説・「岡本監輔氏」
- 【三】伝記・岸上質軒「岡本章庵（樺太最近探索者）」
- 【四】雑説・佐田白茅「岡本監輔小伝附録荒井直盈」
- 【五】雑説・佐田白茅「岡本監輔支那遊歴の紀事」
- 【六】短文・『海国急務』序
- 【七】短文・『千島探検誌』序

#### 【はじめに】

本稿は岡本章庵関係の諸資料（自伝・伝記・書簡・短文・雑説など）を翻刻し紹介するものである。これは細部において不明な点を多く残す岡本章庵研究のために欠くことのできない作業であり、先に提出した岡本章庵調査委員会編『アジアへのまなざし岡本章庵』（阿波学会）を補充するものである。

さて、翻刻する資料は多岐に渡り、また現在も随時調査中で

あるから、明らかにしたものから順次紹介することとし、最終的にまとめる段階で系統立てて整理する予定である。翻刻については概ね以下の凡例による。例外はその都度注記する。

#### 【凡例】

- 一、各資料ごとに【】で括って通し番号を附した。
- 一、各資料ごとに自伝・伝記・書簡・短文（岡本によるもの）・雑説（他者によるもの）等の内容分類を附した。
- 一、資料が漢文の場合は原文と書き下し文を、漢字片仮名交じり文の場合は漢字平仮名交じり文を、漢字平仮名交じり文の場合はそのまま表記した。
- 一、各資料の最後に原文の記述形式を○に括って示した。
- 一、旧字・俗字は新字に改めた。
- 一、旧仮名（ゐ・んゑ等）は新仮名に改めた。
- 一、明らかに誤字とわかるものは改めて注記した。
- 一、適宜『・』及び句読点を付した。
- 一、適宜ルビを削除・加増した。
- 一、適宜語釈を付した。

【一】年表・「韋庵岡本監輔氏年表」

『阿波国史談会誌』第四号（阿波国史談会）

（明治四十四年二月）

同二年

山東一郎と相知る。京都に至り一橋中納言及監察岩田半太郎、川村順一郎に説く。露国に「使<sup>つか</sup>せんとする小出大和守に謁して所説を陳ず。時の不可なりと見て帰省す。

同三年

京都に上り再び清水谷氏に寓す。山東一郎と共に坂本龍馬を木屋町の寓に訪ひ北地の説を陳ぶ。小島謙助（後に雲井龍雄）の來訪あり。大に北地に就て談ず。山東等と共に北門社を結ぶ。『北蝦夷新志』を著す。

天保十年 十月十七日 阿波国美馬郡三谷村に生る。  
嘉永六年 （十五歳）岩本贅庵<sup>ぜいあん</sup>の門に入り有井進齋と相知る。有井門にて高橋頭正<sup>しん</sup>と相知る。藤川三溪に寓し北蝦夷の説を聞く。

安政三年 （十八歳）京阪に遊び諸方の士に交り清水谷中將の邸に寓す。

文久元年 （二十歳）江戸に出て杉原晋斎の家に寓す。北蝦夷は即ちサガレン島たるを知り、速<sup>すみやか</sup>に往て北門の鎖<sup>くわ</sup>（註2）を蔽にせんと欲す。成島柳北等の家に寓して北方の急務を論ず。横浜に來り將軍に返翰を迫り居る外船を焼払はんとする友人に其非計を説きて之を止む。

文久三年 函館に到り組頭平山省齋に寓し進んで樺太シルトタシナイ迄到る。函館に歸りて奉行に北地の説を陳ず。

元治元年 （二十六歳）再び樺太に行く。

慶応元年 （二十七歳）函館奉行より樺太奥地探検の許可を受け東岸より北行して全島の北端ガオート岬を廻り「日本領岡本文平建之」の標を建つ。黒龍江に至りて久<sup>く</sup>春<sup>しゅん</sup>古丹に帰る。

同三年

丸山氏等召還せらる。依願本官を免ぜられ位記返上す。直垂地一卷を下賜せらる。  
開拓使御用あるにより滞在仰付けらる。『窮北日誌』二卷・『北門急務』三卷成る。  
陸軍省參謀局編纂課雇申付けらる。支那派遣申付けらる。

同四年

七年

九年 再び支那派遣申付けらる。

十年 『東洋新報』を發刊す。東京大学雇申付けらる。

十二年 『万国史記』二十卷・『要言類纂』六卷を著す。斯文学会創設に<sup>あずか</sup>与る。

十五年 東京大学予備門教諭に任ぜらる。太政官より「夙に北地開拓の志を起し、元治・慶応の際、<sup>しげば</sup>該地を跋渉し、終に職を開拓使に奉じ、尽力不<sup>すくなく</sup>少。依て為其賞金貳百五十拾円、下賜」せらる。『小学新編』三卷を著す。

十六年 斯文学会撰任文学。『小学修身新書』六卷を著す。

十七年 『万国通典』十二卷を著す。

十八年 『古今文髓』二卷・『義勇芳軌』二卷を著す。

十九年 第一高等中学校生徒漢文教授囑託。『勸業新書』八卷を著す。

二十一年 斯文学会職務被差免。

二十二年 『岡本子』五卷を著す。

二十三年 『祖志』六卷を著す。独逸協会学校教授囑託せらる。

二十四年 特旨を以て叙従五位。千島に向ふ。

二十五年 千島義会の檄を發す。『千島見聞録』を著す。千島拓殖を帝國議會に請願す。

二十六年 『開国致富要覽』・『耶蘇新論』を著す。上総殖生学館に招聘せらる。

二十七年 徳島県尋常中学校長に任ぜらる。

二十八年 『皇道鼓吹』・『名神序頌』・『万民宝典』を著す。

三十年 徳島中学校長を辭し台湾總督府國語学校教授に任ぜらる。『論語正本』成る。

三十一年 台湾國語学校教授を辭し東京にて中正義塾を創め私立神田中学校長を囑せらる。

三十二年 『教育勸語正解』・『垂細垂之存亡』を著す。

三十三年 『國文の葉』を著す。神田中学校長を辭し清國に渡航す。

三十四年 『西学探源』四卷・『鉄鞭』四卷・『孝經頌義』一卷

・『大日本中興先覺志』二卷を出す。清國より帰り更に北京警務學堂の聘に應じて渡清す。

三十五年 『知新學源』一卷・『大日本維新人物志』二卷を著す。警務學堂を辭し帰京。直に北海道に渡る。

三十六年 腦溢血症に罹り大學病院に入る。

三十七年 特旨を以て正五位に叙せらる。十一月九日卒す。

(漢字片仮名交じり文)

(註1)後の芳川頤正。

(註2)錠前と鍵、転じて門戸のしまりのこと。

(註3)政府に登用されて官についた藩士・庶民の稱。

【二】雜説・「岡本監輔氏」

『日本人』七十二号（政教社）

（明治二十四年）

烈士暮年、壯心不已。岡本氏の若きそれ然らずや。嘗て蛮貊の邦土（註1）を踏みて、国民に拓北の雄圖を促し、涕を擣（み）て柯太交換の不可を説きしは一夢の如し。变故百端（註2）、時事益々非に、志望皆違ひ、殆ど為すべからず。猶ほ禹域（註3）に入りて、東方文明の淵源を探り、洙泗（註4）の流を汲まんとし、著書等身（註5）、亦伝ふるに足るなり。朱顔健歩、鬢（お）毛の老を告ぐる欺くべからず。乃ち此時に及で單身絶海、寒の島嶼（註7）に航し、宿昔報国の志を全うせんとす。偉といふべきかな。

（漢字片仮名交じり文）

（註1）樺太をさす。蛮貊はえびすのこと。

（註2）非常のできごとが次から次に起こること。

（註3）中国のこと。

（註4）孔子の故郷を流れる洙水と泗水という二つの川の名。ここでは孔子の学問をさす。

（註5）ここでは岡本の著作に彼自身がそのまま投影されているとの意。

（註6）壮健なさま。

（註7）千島列島をさす。近寒は水が凍り付いてとけないほど寒いこと。

【三】伝記・岸上質軒「岡本章庵（樺太最近探索者）」

『太陽』十八号（博文館）

（明治三十七年）

祖父の感化

王師連勝（註1）の余威を以て、急撃樺太を平定せしより、樺太の名俄（にわか）に高く、随（したが）つて江戸幕府時代、北門経営に意を用いたる人々の名亦頤はるるに至れり。寛政以降、北門の経営に意を用いたる人々は盡し許多ならんも、去月八日史談会に於て、靈位を設けて祭りたる諸賢は左の三十六名なりき。

紺備後広長、佐藤権左衛門、原谷重政、高橋治太夫、中村某、松平越中守、大石逸平、新井隆助、高橋清左衛門、木村謙次、武石祐左衛門、林子平、近藤重蔵、平山行蔵、最上常矩、和田兵太夫、羽太正義、松田伝十郎、間宮林蔵、河尻肥前守、筒井肥前守、川路左衛門尉、堀織部正、村垣淡路守、河津伊豆守、向山隼人正、小出大和守、石川駿河守、竹内下野守、松平周防守、杉浦兵庫頭、栗本安芸守、松浦武四郎、岡本監輔、丸山作樂、戸川筑前守

中に就て、最も完全に、最も周密に樺太を踏査したるは、韋庵岡本監輔氏なるべし。

韋庵初名文平、後監輔と改む。父名は周平、母は須藤氏、天保十年十月十七日阿波国美馬郡三谷村に生る。祖父忠利、少にし

て豪邁不羈、後節を折て書を読み医を業とし、東齋と号す。京阪の間に遊び、諸名流と遊び、尤も篠崎小竹、大塩中齋等と善し。郷に帰るの後、喜みて争訟を決し、名声頗る顯る。又好みて時事を談じ、毎に外題を以て憂となし、屢ば建白する所あり。韋庵の性行、蓋し東齋の感化に得る所あるなり。

#### 北蝦夷探検

韋庵幼にして家道裕ならず、夙に耕耘に従事したれども、自ら之を肩しとせず、好みて書を読み、邑人堤大介に従うて学び、吠吠註との間手に巻を釈かず。嘉永六年歳初めて志学、徳島藩藩儒岩本齋庵の門に入り、安政三年に至る。其間一たび讃岐に遊び、藤川三溪の家を主とし、始めて北蝦夷の事を聞く。爾後京阪に遊び、藤沢東咳、池内陶所等の家に客たり。又清水谷卿（公考）の家に寓して公子に教授し、傍ら北蝦夷の事を調査す。文久元年十一月、江戸に遊び、幕府の儒官杉原晋斎、成島柳北等の家に寄寓す。偶ま散策の途次、御成街道の古書肆に於て、間官倫宗が著す所の『北蝦夷図説』を見、之を購ひ歸りて、北蝦夷は即ち外人の所謂サガレン島なるを知り、探検の念益々急なり。

超て文久三年四月、志を決して驟然（註）江戸を發し、函館に至り、組頭平山省齋の許に寓するもの十余日。省齋の書を請うて樺太に抵らんと、單身北行して、七月の末西海岸ナヤシまで至りしが、冬期に向ひたる為め目的を達せずして函館に帰る。是

れ翁が北蝦夷探検の第一次なり。

翁樺太より還り、松前藩医古川左膳の文事あるを聞き、往て之を訪ひ、帰後文を作りて之に贈る。文意松前氏をして幕府に代り、北辺の鎮たらしめんと謂ふに在り。平山省齋は幕府の吏なれば、此書を見て大に怒り、且縋々（註）として幕府の奉ぜざるべからざるを説く。翁その共に談ずべからざるを知り、遂に過を謝して止みぬ。

#### 樺太第一の遊

慶応元年五月。翁再び樺太探検の途に上る。前遊に鑑みて、今回は函館の足輕西村伝九郎を従へ、蝦夷船一艘を買うて糧食等一切を積み出て發し、閏五月真知床を廻り、六月又エに到り、七月樺太の東北端ガオト岬を廻航し、西岸諸地を経て黒龍江口に抵り、更に江を流れて風土を視察せんとしたるも果さず。七月二十三日ウシヨロに帰着し、十一月二十七日土人六人を従へて、復び樺太に入り、十二月九日九春古丹に帰れり。此遊に調査し得たる所を録して、『北蝦夷新誌』（二卷）といひ、世に行はる。時に翁年二十七歳。血氣鬱勃（註）5、殆ど制すべからざるものあり。縫江の詩一篇を録して其風采を想望せしめん。

洪河数十里。遠自西南際。对岸山断続。一望無蒙翳。樹色何鬱蒼。衆鳥此回翔。地形霸王略。物象仙人郷。家々多傍水。各自相遷徙。百年無賦役。釣漁代耘紆。視我笑嫣然。語々見

精神。俗則化外機。心為中州民。比羅夫已矣。余風今安在。空談紙上文。邈哉一千載。天辺日光薄。海角腥風惡。誰驅蓬戸者。開壘力東作。願陪命世雄。隨分効孤忠。苟存經遠志。何圖一時功。

又エはロモウ河口の濱をなせる所なり。

憂念仲々

慶応二年春、函館奉行杉浦兵庫頭(誠)に謁して、建白書を上る。既にして外国奉行小出大和守(秀実)が魯国と議して、樺太日魯の境界を九春内に定めんとすと聞き、翁以爲らく、樺太全島は我が版図たること、既に疑ふべきなし。然るに境界を議する如きは、事の誤まれること太甚し。宜く急に小出を誡めて、その議を中止せざるべからずと。俄に小出を追躡して京都に上り、一橋中納言(慶喜)の執事黒川嘉平、監察岩田半太郎・川村順一郎等に説き、亦自ら小出に謁して所見を論陳したるも、小出は実務は傍觀者の知る所に非ずと称して肯かず。

此年父周平を阿波に省し、それより淡路に赴き、翌三年正月京都に抵りて、復び清水谷家に寓す。十一月幕府東北諸藩に令し、其地方土民の樺太島を開拓することを許すに及び、翁深く感ばかる所あり。友人山東一郎(直砥)と共に、阪本龍馬を淺草田原町の僑居に訪ひ、大に北辺の急務を論ず。龍馬為に動く所ある者の如し。

樺太經營

明くれば慶応四年。即ち明治と改元あり。幕府既に大政を奉還し、朝廷万機を革新したまひ、太政官を置きて庶政總覽の所となす。是歳の春、翁、巖倉(具視)、大久保(利通)、広沢(兵介)諸公を説き、亦北辺の事に就て建言する所あり。且清水谷・高野等諸公卿を擁して蝦夷に走らんと欲したるが、偶ま四月命あり。徴士に拝し、内国事務局権判事に任ぜられ、函館裁判所在勤を命ぜらる。時に清水谷卿は任に總督に在り。五月翁は卿を奉じて函館に到る。六月樺太全島一切事務委任を命ぜられ、乃ち樺太に航し、同地の魯人に告ぐるに、王政維新の大旨を以てし、諸所に鎮撫を置き、漁場を開き、山林を墾き、以て明年に至る。其間魯人と抗争する者少からざりき。

明治二年五月、大主典東善八郎をして、遠淵に、抵り魯人と交渉せしめたるに、魯人兵百名許を以て、倏ち善八郎の寓を囲む。善八郎叱して之を斥く。六月中旬、一日天氣冥濛(註6)として日色濃暗(註7)なり。衆曰く「魯人來寇の兆ならん」と。二十四日魯艦果して来り、先づ祝砲を發し、使を翁の官舎に遣し、隊長陸軍中佐ボツトボウコウニク、テフレラトーウィツチの旨を伝ふ。曰く「本國黃帝の命を奉じ、宿舍を母子泊に営む」と。翁乃ち善八郎をして之に接せしめて曰く「某処には土人の墳墓あり。某処は漁民營生の地なり。然るを之を顧みざるは、是れ小出氏との条約を破るものなり。抑も何等の弁あるか」と。魯使語塞り、其類此(註8)たるあり。唯曰く「本國皇帝

の命のみ。予儕の知る所に非ざるなり」とて、遂に屋舎を海岸に構へ、夜陰に乗じて墳墓を發掘す。翁仍て自ら狀を政府に訴へんと欲し、其婦任の日を待たんことを、土人に告ぐるに、土人皆既に我に帰服し、一も魯に与せんとする者なし。翌日翁の發程するに臨み、土人皆泣涕して港頭に送りて曰く「島の神よ、無事に帰り来られよ。某等謹みて待ち奉らん」と。島の神とは蓋し一島の保護神の意なり。其如何に翁に服し、如何に魯人を憎み恐るるかを知るに足るべし。翁亦涙を揮つて慰めて曰く「汝等も無事なれ」と。乃ち南上す。

七月其職を免ぜられ、更に開拓判官に任ぜらる。屢ば島義勇等と論争する所あり。時の長官は鍋島侯（直大）なり。八月外務御用掛兼任を命ぜられ、同月本官を以て樺太出張を命ぜられ、九月五日従五位に叙せらる。同月九日外務大丞丸山作樂、同權大丞谷元道之と共に、土民數十、農工四百人を率いて樺太に向ふ。十二月二十四日、樺太函泊に於て、魯國陸軍中佐テフレラトウイツチと談判す。翌三年一月廿日復び交渉する所あり。時に魯人は港内に埠頭を築きて、土人の漁業を妨礙せしむるを以て、同月二十二日、川島樺大録等六名の吏員を遣はして、之を視察せしめたるに、六名は魯人の捕ふる所となれり。三月四日丸山・谷元両氏召還せられ、十月翁辞表を上り、閏十月本官を免ぜられ、並に位記返上の命あり。斯くて在官中特に勉勵せる功を以て、直垂地一卷を下賜せらる。翌四年三月、翁樺太

より還りしが、同年七月より六年三月まで、開拓使御用のため、札幌滞在を命ぜらる。時の長官は黒田清隆伯なり。明治八年魯國と千島樺太交換の事あり。十一月遂に条約を締結す。翁畢生心血の注ぐ所は、北門の經營に在り。故を以て交換の事を聞くや、憤懣措くこと能はず。一時寢食を忘るるに至れり。其著『窮北日誌』（二卷）、『北門急務』（三卷）の如き、最も参考に資するに足るものありといふ。

#### 翁の後半生

翁桂冠の後には専ら筆硯と親み、傍ら教育の事に従ひ、或は神奈川県外務課、陸軍省編纂課、参謀本部編纂課等に職を奉じ、或は長崎県師範学校、東京大学、第一高等学校、哲学館、独逸学協会等に在て育英の事に務め、或は命を奉じて支那に赴き、兵事新聞主筆となり、東洋新報を起し、斯文学会を創め、或は南總に学会を建つ。其間著す所の書概ね十数種。多くは漢文を以て之を記す。『万国史記』、『万国通典』の二書の如きは、夙に支那に行はるといふ。

十五年八月、太政官より命あり。曰く夙に北地開拓の志を起し、元治慶応の際、屢該地を跋涉し、終に職を開拓使に奉じ、尽力不尠。依て為其賞金二百五十拾円下賜せらる。

尋で二十四年三月に至り、旧功を嘉賞せられ、特旨を以て従五位に叙せらる。

翁時に感ずる所あり。此年五月東京を發して北海道千島に赴く。舟舢舨に抵る。往事を追懷し、慨然詩を賦して曰く

抵死羞看柯太島。余生又至餌禽州。回頭西北雲漫處。定有髯奴駕鐵舟。

終に江湖の伝唱する所となれり。翌二十五年一月、千島義会を起し、復た北遊の舉ありしが、所有の船舶難破の厄に罹りたるのみならず、千島拓殖の請願は貴族院の容るる所となりしも、衆議院に否決せられ、壮心空しく蹉跌して、遂に南緯に隱退せしが、二十七年、徳島県尋常中学校長に任ぜられ、以て三十年三月に至る。同年七月、台湾總督府國語學校教授に任ぜられ、翌年七月職を辭し、八月東京に歸りて中正義塾を起し、十一月私立神田中学校長を囑せらる。

三十三年五月、中学校長を罷め、十一月復た清國に航し、翌年上海より杭州・武昌等の諸地に遊びて歸り、三十五年二月、北京警務學堂の聘に応じ、また清國に赴き、七月帰朝して直ちに北海道に赴き、九月東京に帰る。

翁志を当世に得ず。其發して著術となるもの、統て六十余部。悉く経世有用の書に非ざるはなし。既刊のもの約三十余部。其目左の如し。

- 『北蝦夷新志』 『銅北日誌』二卷 『北門急務』三卷 『万国史記』二十卷 『要言類纂』六卷 『小学新編』三卷 『小学修身新書』六卷 『万国通典』十二卷 『国史紀要』三卷

『古今文髓』二卷 『義勇芳軌』二卷 『勸業新書』八卷

『岡本子』五卷 『祖志』六卷 『儒學精彩』 『神道発揮』

『千島見聞録』 『開國致富要覽』 『耶蘇新論』 『皇道鼓吹』

『名神序頌』 『万国通典』 『論語正本』 『教育勸語正解』

『垂細垂之存亡』 『國文之榮』 『西学探源』四卷

『鉄鞭』四卷 『孝經頌義』 『大日本中興先覺誌』二卷

『知新學源』 『日本維新人物志』二卷

三十六年二月、偶、<sup>また</sup>ま腦溢血の症に罹り、口言ふこと能はず、

双手自由を失し、医治遂に効なし。然るに三十七年征露の役起るを聞くや、欣然病痼(註10)の身に在るを忘るる如く、日に戦報を聞きて以て快とせり。同年十一月九日、特旨を以て正五位に叙せられしが、同日終に小石川諏訪町の寓に卒す。享年六十有六、超て十三日、麻布笄町長谷寺に殯葬せり。

翁平生奇材を有し奇志を抱き、而して轉軻不遇(註11)を以て終る。亦哀むべし。然れども王師既に樺太全島を平定して、翁の宿志今や貫徹せり。況んや翁の名は其等身の著書と共に永く不朽なるをや。吁嗟、翁以て瞑すべきなり。(漢字片仮名交じり文)

(註1)日露戦争をさす。

(註2)用水の濫と田の畦。ここでは農村をさす。

(註3)行動がすばやいさま。

(註4)こまじまと述べ立てること。



(註5) 生氣や意氣のさかんなさま。

(註6) 暗いさま。

(註7) 濃い赤土色。

(註8) ひたいに汗を流すこと。

(註9) 妨害に同じ。

(註10) 長わずらいのこと。

(註11) 事が思うようにはこばず不遇なこと。

【四】 雜説・佐田白茅「岡本監輔小伝附録荒井直盈」

『名譽新誌』第五号（大来社）

（明治九年四月）

君、阿波の人。世々畝畝の間に居り、旁に医を業とす。幼くして学を好み、長じて大志あり。好て遠遊をなし、足跡亜細亞に遍し。初め家貧くして学資なし。上國に遊學して常に食客たり。其京師に在るや、清水谷公考氏の家に寓す。文久癸亥（註1）、東京に在り。一たび蝦夷に遊び、其事情を探らんと欲す。林鶴梁の二子羽倉綱三郎・竹垣龍太郎、共に其志を感じて之を助成す（二人皆既に没せり）。五月、箱館に至り、調役平山成斎（謙二郎と称す）に依り、六月、遂に北蝦夷に赴き、將に柯太全嶋を一周せんと欲す。時候已に寒に向ふを以て果さず。即ち奥地シルトタンナイに至て還へる。還へる時は復た平山氏に客たり。

其明年、北地在住の命あり。歳に三十円を給す。是歳三月、柯太に至り、直に極北に赴かんと欲し、果さずして還へる。明年乙丑（註2）の四月、西村伝九郎を伴ひ、白瀨を發して東岸より廻島す。蝦夷製する所の独木舟に乗り、岸に沿ふて巡行し、野宿すること四月。始て西岸鵜城の地に出づることを得たり。明年丙寅の三月、函館に到り、奉行大和守を見て、柯太の事を論す。君、其説を喜びず。偶々小出某、魯國に使すと聞き、昼夜兼行、熱を犯して京師に至る。乃一橋公の執事及び大監察某等を見て、其所見を陳す。然ども君の説く所、遂に聴かれず。小出、魯に往き、雑居の約定る。君も某郷に帰れり。当時、君の志を輔くる者、石狩の調役荒井直盈・林鶴梁の諸人なり。鶴梁は別に伝あり。慶応丁卯、君再び京に入り、清水谷氏に寓す。戊辰の春、大政既に復す。君は清水谷氏を勧め、共に蝦夷の事を建議す。是に於て、天皇、行政官に臨み、親から開拓の策を問ひ、清水谷を以て箱館裁判所総督に任じ、君、樞判事に補せらる。是歳六月、君、柯太に至る。会々幕士の脱走する者、箱館に抛り、内地と声問通ぜず。君専ら一嶋の事務を總理す。明治二年六月、魯人久春・古丹に抛る。君、之を争ふ。魯人、説、屈す。然ども肆行（註3）止まず。君、京に登りて之を訴ふ。八月、開拓判官に転じ、再び柯太に赴く。外務大丞丸山作樂等、君と同行す。是歳、魯人、我が六士を掠むるの事あり。作樂等、為めに登京す。君独り留て久春・古丹に在り。九月、開拓次官

黒田清隆、柯太に來り、全島の事務を処置す。是に於て君職を辭し、京に登る。則ち御用滞在の命あり。繼で神奈川県に往き、開港以來の始末を編纂す。未だ功を竣へずして免ぜらる。

又長崎師範学校御雇教官を命ぜらる。君は友人(註4)を薦めて之に代ふ。君著す所『北蝦夷新志』一卷あり。君の柯太に在るや、層氷積雪の間に往來し、豺狼鯨鯢の窟に寢処し、苦辛万状、言ふに勝へざる者あり。故に備さに其事を記し、世の安逸に耽る者をして儆戒(註5)する所以を知らしむ。

荒井直盈は金助と稱す。直盈、力を北地に用いること甚だ厚し。石狩・小樽内を開きしもの、此人を以て鼻祖(註6)とす。直盈、平生、俗吏の因循を慨して已まず。箱館に在り、傷寒(註7)を患ふ。所見あり、奉行杉浦氏に面して之を陳ぜんと欲す。夜中、雪を犯して五稜郭に入る。不幸、濤に落ちて没せり。

(漢字片仮名交じり文)

(註1) 文久三年。

(註2) 慶応元年。

(註3) 勝手気ままな行いのこと。

(註4) 有井進斎をさす。

(註5) いましめること。

(註6) 最初に物事を始めた人のこと。

(註7) 腸チフスのこと。

## 【五】 雜説・佐田白茅「岡本監輔支那遊歴の紀事」

『名譽新誌』第八号(大來社)

(明治九年五月)

君既に北地の跋涉を止め、雄心勃勃、髀肉の歎(註1)あり。乃將さに支那に遊ばんと欲す。明治七年の秋、天津に航し、山東の地を觀んとす。天津に至る。会々台院の警あり。遊觀、意の如きを得ず。因て登州府蓬萊県蓬萊閣等の処に遊びて還る。八年四月、大佐福原和勝と再び支那に航す。六月、北京に至り、遂に居庸関万里長城、及び明十三帝陵・万寿山等を觀る。七月、和勝と同じく北京を發し、通州より東北灣水を渡り、伯夷・叔斉の故居を過ぎ、榆関を踰へ、山海関に抵り、錦州等の処を経て、盛京に達し、遂に南して遼陽城を過ぎ、營子口に到り、又東の方蓋州を過ぎ、盆溝に抵り、以て朝鮮辺疆の風を觀んと欲す。八月、山東烟台に航し、煙台より再び天津に航し、以て北京に帰る。此に至りて福原氏と別る。又將さに南の方山東・河南・湖北の地に遊んとす。九月三日、單身天津を發し、黄河を渡り、濟南を發す。此際、滯留十余日。巡撫丁宝楨を見て筆話す。宝楨、忠厚老成、学者の為に仰がる。又徐啓・譚陳・錦李・述翁・左雲蓮、及び郭翊廷・張洽等十余人と交る。皆一時の名士なり。此より去て泰山に登り、所謂大夫松・無字碑・封禅台・磨崖碑等の故跡を訪ひ、左の方徂徠山を望み、汶水を渡り

て、西南曲阜に<sup>い</sup>抵り、孔顔廟・孔林・周公廟・少昊陵に謁し、三品挙げ官孔慶鏗を見て傾蓋故の如し。衍聖公孔祥珂は母の憂に<sup>い</sup>丁りて見ることを得ず。孔慶鏗は贈詩あり。礼遇甚だ優なり。遂に南して無雪壇に遊び、沂水を渡り、馬鞍山を過ぎ、孟母の墓を觀、鄒県に至りて、孟子の廟に謁し、子思『中庸』を作るの処・孟母機を断つる処を觀る。又西北兗州府に<sup>い</sup>抵り、魯公の城址を觀、濟寧を過ぎ、嘉祥に到り、曾子及び澹台滅明の故居を觀、鉅野城・武曹県を経て、成湯陵に謁す。即ち伊尹の太甲を放つる処なり。十月初旬、開封に達す。即ち大梁の地。宋・衛・鄭三国の界、五代及び宋の都する所。此より中年を過ぎ、鄭州に到り、子産の故里を觀る。東里、是なり。宋陽阜の甬道(註2)を經る。即ち西亳湯の都する所なり。南東に轉じて登封に到り、崇山の最高頂に上り、嵩陽書院の漢封柏を觀、少林寺に遊び、達磨洞を窺ふ。即ち九年面壁の処なり。此より西北洛陽に到る。天津橋・北邙山・銅駝街・老子の故居等を觀て、南龍門香山に登り、汝州に出て、汝墳を過ぎ、黃柏山を望む。即ち長沮・桀溺、耦して耕すの処。更に南して葉に到る。即ち葉公子龍が邑、甌龍台あり。更に南西して南陽に<sup>い</sup>抵り、臥龍岡を觀、襄陽に<sup>い</sup>抵り、峴山に登り、隨淚碑を觀、東南に轉じて安陸・雲夢を過ぎ、漢口・武昌に出づ。因て黃鶴樓・晴川閣を觀、逗留數日。蜀人朱滋澤・曾子金と交る。二人巨儒の稱あり。此より輪船九江に達し、廬山を望み、琵琶亭を觀る。遂に航して南京

に<sup>い</sup>抵り、四望山・呉の孫權の城址を觀る。時に惜陰書院長薛尉農と相見る。尉農詩に長じ、清国第一と稱す。又鎮江及び揚州に<sup>い</sup>抵り、遂に上海に達す。時に九年一月なり。天津を發せしより、殆ど百日。交る所の人、枚舉に暇あらず。広東の范友琦、浙江の談德培、福建の梁修年等の如き、亦知名の士なり。君、一月二十日を以て東京に帰る。或人、君に問ふて曰く「支那は固より大邦なり。然ども英仏の戦争以来、外事多端。加之、近年帝位屢々易はり、朝野穩かならず。外人より之を視れば、危きこと春水を踏むが如し。知らず、實地の景況、如何。想ふに竹槍薦旗(註3)、乱を村落の間に唱ふ者多からん。」君答て曰く「否々。支那、素より振はず。何ぞ敢て歐洲に比せん。然れども余之を察するに、支那の邦たる、其形危くして其実安し。何となれば万民、其上に背くに忍びざるの实あり。是を以て敢て背く者あることなし。何ぞ内外の紛紜に患んや。」或の曰く「所謂其上に背くに忍びざるの实ありとは何ぞや。」君又答て曰く「租稅薄し」と。邦人、古へは支那に遊ぶ者少からず。然ども遊跡の広き、未だ君に若く者あらず。(漢字片仮名交じり文)

(註1)長く馬に乗らなかつたために、内股に肉がついた事を嘆く。實力を発揮する機会がないこと。

(註2)両側を塙で囲つて外から見えないようにした道路のこと。  
(註3)むしろの旗。

【六】短文・『海国急務』序

藤川三溪『海国急務』（海峯社蔵）

（明治十八年十一月）

三溪藤川翁、著『海国急務』一卷。大意謂「我邦四面瀕海魚塩之利、冠絶宇内。而距岸二十余里、国権係焉。自沖繩諸嶋至千嶋東畔、広袤幾過支那全国海岸。抛西人夷駿、海産之利、多于陸田、実十有七倍矣。举国人为漁夫、使其常食魚介、其余鬻之于海外、可以為一大富強国、而雄飛宇内也」。其言鑿鑿中肯綮。号曰『海国急務』。豈虛乎哉。余昔遊于北海、觀大小鯨鯢成隊、游泳吐沫、一望數十百里、如驟雨至者、以為天下之奇觀。嘗与翁話、及此事。翁擊節称快。尋翁創捕鯨会、拮据尽心。又至著此編、以建白之大政官。願邦人長乎沃土、乏於遠略。未能使翁之言施于実際。又如南北諸嶋の如、動致西人出沒覬覦。袖手傍觀、附之不問、可嘆也。余聞「小笠原島東南數十百里、嶋嶼大小羅列、以千万計、直連南亞米利加。林木蔭鬱、果実四時不絶、魚介紛錯、宝玉充切。昼夜貿易風習、空氣玲瓏適体」。髣髴桃花源裡仙竇。若収而有之、併海広袤幾千万里。其為世益孰大焉。亦海国之急務也。翁其施網于此乎。余欲持漁具而從之也。

明治十八年五月下浣

岡本監輔識

三溪藤川翁、『海国急務』一卷を著はす。大意に謂ふ「我邦四面

の瀕海の魚塩の利は、宇内に冠絶す。而して岸を距てて二十余里は、国権係る。沖繩諸嶋より千嶋東畔に至るまで、広袤（註1）幾んど支那全国海岸に過ぐ。西人の夷駿に抛れば、海産の利は、陸田より多きこと、実に十有七倍なり。国人を挙げて漁夫と為し、其をして常に魚介を食はしめ、其の余は之を海外に鬻がしめば、以て一大富強国と為りて、宇内に雄飛すべきなり」と。其の言、鑿鑿（註2）として肯綮に中る（註3）。号して『海国急務』と曰ふ。豈に虚なるかな。余、昔、北海に遊び、大小鯨鯢の隊を成し、游泳して沫を吐き、一望数十百里、驟雨（註4）の至るが如き者を觀る。以為らく、天下の奇觀なり、と。嘗て翁と話し、此の事に及ぶ。翁、節を撃ち快と称す。尋いで翁捕鯨会を創り、拮据（註5）して心を尽す。又、此の編を著して、以て之を大政官に建白するに至る。願みるに邦人は沃土に長じ、遠略に乏し。未だ翁の言をして實際に施さしむるあたはず。又、南北諸嶋の如きは、動もすれば西人の出沒覬覦（註6）するを致す。手を袖にして傍觀し、之を不問に附すは、嘆くべきなり。余聞く「小笠原島の東南数十百里は、嶋嶼大小羅列し、千万を以て計へ、直ちに南亞米利加に連なる。林木蔭鬱、果実四時絶へず、魚介紛錯（註7）として、宝玉充切（註8）。昼夜貿易風の習習（註9）として、空氣玲瓏にして体に適す」と。桃花源裡の仙竇（註10）を髣髴とす。若し収めて之を有せば、併びに海の広袤幾千万里なり。其の世益と為ること孰れか焉より大ならん。亦海国の急

務なり。翁、其れ網を此に施すか。余、漁具を持して之に従はんと欲するなり。

明治十八年五月下浣

岡本監輔識

(漢文)

(註1) 南北の長さのこと。

(註2) 論旨の明らかなさま。

(註3) 道理を説いて要点になつてゐること。

(註4) にわか雨、夕立のこと。

(註5) 難儀すること。

(註6) 身分や立場にはずれたことを望むこと。

(註7) ことごとく込み入つてゐること。ここでは種類が豊富なこと。

(註8) 「宝玉(林木・果実・魚介)」が満ちていふことであること。

(註9) 風がそよそよと吹くさま。

(註10) 仙界に同じ。

### 【七】短文・『千島探検誌』序

関熊太郎『千島探検誌』(八尾書店)

(明治二十六年三月)

茨城県有愛國之士関熊太郎。嘗て第一高等中学校、孜孜修業。聞余唱千島説、慨然投筆、傾家貲合同志、從余于挾提。親服捕魚、未至成功、力尽而帰。与余相依、情如父子也。頃著一書。

曰『千島探検誌』。展而閱之、自土質氣候物産人情風俗、及外客密獵等状、逐條論列。繼到周密。未附意見六條。曰宜徙色谷土人于占守。曰宜置島司。曰宜開定期航海。曰宜深查港灣、以築泊船場。曰宜解海狸之禁。曰宜改借地法、以防壟斷。其他設塩倉、架電線、置海兵团、移諸囚徒之類。皆屬政府急務。若夫庶民企圖報效者、莫如徙住各处以營事業。必有財本維持三年、然後能致有益。其言切中時弊、的確不易。世之講拓殖者、讀此書、則思過半矣。余謂、必有財本維持三年者、自屬万全之策。然亦顧着手先後如何耳。如青魚鮭鱒、每歲豐歉無常。其要財本尤大。故不得不待三年。是屬豪民專業。至於大口魚及其他諸魚与海草諸物、則年々收穫、無有豐歉。其財本亦不要多。從事于此、零細網羅、今年即有今年之収、而明年以後、其収愈大。未必待三年之後。是屬小民分業。專業多失、分業寡過。今之言拓殖者、宜自分業始。多徙散私財奮進不回顧者、不於事前給俸銀、而於事後分利益、使其各自勵精互相生養也。余為千島慮、与関生屢談此事。而関生適遺之。固屬可惜。因叙前言、以供読者參考云。

明治二十六年三月中浣

岡本監輔撰

茨城県に愛國の士関熊太郎あり。嘗て第一高等中学校に入り、孜孜(註1)として業を修む。余の千島説を唱うるを聞きて、慨然として筆を投じ、家貲(註2)を傾けて(註3)同志を合し、余に挾提に従ふ。親ら捕魚に服し、未だ成功に至らずして、力尽きて帰る。

余と相依り、情、父子の如きなり。頃、一書を著す。『千島探検誌』と曰ふ。展きて之を闢るに、土質・氣候・物産・人情・風俗より、外客の密獵等の状に及ぶまで、條を逐ひて論列す。懇到周密なり。末に意見六條を附す。曰く、宜しく色谷の土人を占守に徙すべし。曰く、宜しく島司を置くべし。曰く、宜しく定期航海を開くべし。曰く、宜しく港灣を深査し、以て泊船場を築くべし。曰く、宜しく海狸(註3)の禁を解くべし。曰く、宜しく借地法を改め、以て墾斷(註4)を防ぐべし。其の他、塩倉を設け、電線を架け、海兵団を置き、諸囚徒を移すの類あり。皆、政府の急務に属す。若し夫れ庶民の報效を企図する者あらば、各処に徙住し以て事業を営ましむるにしくはなし。必ず財本(註5)もて三年を維持することありて、然る後に能く益あるを致さん。其の言、切に時弊に中る(註6)こと、的確にして易はらず。世の拓殖を講ずる者、此の書を読めば、則ち思ひ半ばを過ぐ。余謂らく、必ず財本もて三年を維持することあれば、自ずから万全の策に属せん、と。然れども亦着手先後の如何を顧みるのみ。青魚・鮭(註7)・鱒の如き、毎歳豊歉(註8)常なし。其の財本を要すること尤も大なり。故に三年を待たざるを得ず。是れ豪民の専業に属す。大口魚及び其の他の諸魚と、海草諸物とに至りては、則ち年々の收穫、豊歉あることなし。其の財本も亦多を要せず。此に従事して、零細なるも網羅せば、今年には即ち今年の収あり、而して明年以後は、其の収は愈い

よ大ならん。未だ必ずしも三年の後を待たず。是れ小民の分業に属す。専業は失多きも、分業は過寡し。今の拓殖を言ふ者は、宜しく分業より始むべし。多くは私財を散じて奮つて進み回顧せざる者を徙し、事前に俸銀を給せずして、事後に利益を分かち、其の各自をして励精して互相に生養せしむるなり。余、千島の為に慮り、関生と屢此の事を談ず。而して関生(註9)適たま之を遣む。固に惜しむべきに属す。因りて前言を叙して、以て説者の参考に供すと云ふ。

明治二十六年三月中浣 岡本監輔撰

(漢文)

(註1) つとめはげむさま。

(註2) 家財を投じて。

(註3) ビーバーのこと。

(註4) 利益を独占すること。

(註5) 資本の意か。

(註6) 時代の弊害を言い当てていること。

(註7) 鮭。

(註8) 豊作と不作のこと。

(註9) 「生」は「君」と同じ。関熊太郎を関君と称したものの。